酒々井町
郷土研究会々報
第4号
昭52.12.24
発行
酒々井町郷土研究会総務部

第3回 酒々井町史跡めぐりルポ

菊花香る十月二十六日・八日の両日、今年最後の史跡めぐりは天気にも恵まれての内房、木更津方面に出発しました。

どういうわけか二十六日は御婦人方が多く……同行の押尾氏「婦人会にまぎれ込んだかと思った！よ……？」と嬉しい悲鳴も聞かれ――。又二十八日のバスでは尾上の長老京増忠太郎翁のドンく節や左近氏の岸壁の母など次々とのど自慢に楽しい親ぼくの旅でした。

木更津の地名の由来

「きさらづ」の地名は、日本武尊が東国の賊を討とうとして相模から浦賀水道を渡る途中、嵐にあった時、海神の怒りをしずめようと海に身を投じた弟橘姫を尊が偲んで「つぶやいた「君去らず」にもとづくという。

そうなの！

今回の現学は主として渡来人の王仁による文学（漢学）の伝来期や古墳文化最盛の中後期の五世紀ごろ（千五百年前）のものとの対面であった。

史跡見学のアレコレ

―川島計介―

悠久の時の流れの後私・わが家・我が民族の現在があるわけであるが、今回は私どもの祖先の生きざまの一端をこの眼で確かめたり、類推の世界に引き込んでくれたり有難いと思った。

飯香岡八幡宮着。かすかに潮風が流れる広い境内は、今日はひっそりとしていて年輪を重ねた銀杏などの古木の間に社殿が見える。奈良時代の創建といわれ、人皇第十五代の応神天皇が主座神で、後に源氏の信仰が厚かった。

本殿は（重文）室町末期の改築拝殿（県文）は元禄四年焼失による再建とか、境内に石の句碑一基

お神楽の拍子に昇る初日かな（長田青一徳）

木更津の二子塚　今は金鈴塚と呼ばれる横穴式箱形の大きな石棺を蔵した前方後円の古墳。薄暗い横穴の中に横たわる石棺は、昭和二十五年に発掘されて有名になったが、どこから切り出し、どうして運び、どうして組立てたのやら、私どもにはなぞなぞのことばかり。ましてどんな豪族貴人が、どのように埋葬されたのやら――。

「金鈴塚保存館」にある高度の技術を示す数々の副葬品に、千五百年前の祖先の知恵、生活に感嘆するのみであった。その一つ一つにも、その頃の誰かが握ったはずだと思うと一層の親近感が湧いてきた。

△△△

玄室に風の落葉の吸はれけり（松風）

塚の名称と新しく変えた五箇の紙金の鈴は他に展示中とかで見る事はできなかったが、この品を思うだけでも、金の発掘、鋳造の技術など秀でさせられるものが多かった。

県立上総博物館　よく耳にしていた「上総掘り」の精巧な木製模型など、古代から近世までの生活具、装身具、武具などが数百点も展示されているが、少なくとも数時間はじっくりと眺めを落ちつけて見たいものだと思った。

△△△

采和碑ときどきふり返る草紅葉（一甫）

まつは椎のしげみの陰より見下ろせる木更津の街に秋日暮れし（押尾克己）

狸ばやしの証誠寺は、静かな森の茂みの中にある。前住職の隆氏の時、共に県教育庁に在職中だったので曽遊の地である。伝えられる狸塚は本堂向って左側笹藪の中にある。音痴しい童謡全盛時代に野口雨情が請われて大正十三年に作詞、中山晋平作曲が世にうけて全国的にうたわれ一躍有名になった。

△△△

木の実ふる狸ばやしの詩碑の前（一甫）

一匹の狸に檻の時雨かな（松風）

輪をなして狸踊りしメルヘンの境内もいまは街中となる（押尾克己）

第004号（NO2）　酒々井町郷土研究会会報　昭和52年12月24日(土)

……成田小に在職中の大正十四年に担任の五年生のふ、Wという土屋の女の子が作った童謡を思い出した。

〝わたしが取手へ行ったとき
ころころぎころ（鳴いていた
おばさん、そっとまてみなよ
ぽうら、ね　……〟と。

本堂にお詣りしてから堂内を見学して辞去。

底野山神野寺　山は標高三百数十米。約百五十年間にわたる飛鳥朝時代の開基で、薬師如来を本尊とする神野寺。今はバスで楽々。国指定の表門―見事な変風―見上げるような楽の大樹に驚嘆して触ってみた。その外猛獣の虎や底、小禽類を急ぎ足で見て下山の途につく。

（押尾支巳）

〈底野山に向う街道明るきに
立枯れの松隨所にぞ見ゆ
山上に大き伽藍を構へたる
苔への心はかりかねつつ〉

皆さん、さようなら（外国ではこの言葉がないので、また再びというそうなし）そんな意味でサヨウナラ―。（冬）

史跡めぐり見学記

青木朝次

役場大菊展示場前にてバスを待つ。見事な菊・菊・菊

「秋になり菊作ろうと思いけり」の古川柳を想い出しつつ出発の刻を待つ。

飯香岡へ時宮に詣でて一句

〈銀杏のぽとりと落ちて飯香岡〉

金鈴塚石棺の前にて

〈金鈴の塚のでこ見て赤のまま〉

証誠寺の狸ばやしでは満月に照らし出された薄のゆらぐ小高い丘を想像されるが、現状は小丘の繁る薄暗い寺である。童謡でお馴染みの狸ばやしの御があるだけで写しとるものがなかった。門際の土産物屋の老爺が寒そうであった

〈うす暗き狸寺なる竹の秋〉

△　△　△　△

〈裸婦の像、視線の彼方鳥瞰〉

△　△　△　△

底野山神野寺、バスは午後の天候を気づかいながら山頂へと登って行く。車窓は名勝九十九谷附近と思われる景観を展開しながら走る。谷の数はいくつあるか数えきれない。梯を入れたように整然と植林されている杉山を見て能登半島の千枚田、四国のみかん畑を想い出す。想いにふけりつつ山を見ていると人の住みそうもない山あいに小さな大根畑があった

〈九十九谷
木々の合間の大根畑〉

△　△　△　△

大田山公園、金鈴塚遺物保存館、上総博物館と連続見学する先人の努力と智恵に感ずると共に昔の良さは残しておきたいと思う。

△　△　△　△

神野寺の山門を入ると　上野寛永寺から移されたという石の大灯籠が並んでいる　妙な感じで其の間を通り抜け、狂い咲きのつつじを横目に天然記念物の大桑に至る大自然に囲まれた大きな桑樹は根廻り三、一米、目通り二、〇五米高さ十一米と記されている。境内に生堂や芭蕉の句碑があった

〈秋空に枝広げおり大き桑〉

△　△　△　△

帰路は、笠森寺山麓に小憩、楽しく有意義な一日を終える。（終）

書評

加川治良著、「房総禁制宗門史」　不受不施派の弾圧の歴史を、県内に残存する遺跡、遺墨、墓碑銘、金石文などを集録してまとめあげている。

不受不施派とは、日蓮宗の一派。その教理は他宗信者からの供養を受けてはならぬ、他宗の僧へ供養を施してはならぬ、という。同派への迫害は、文禄四年九月、秀吉が京都・方広寺の大仏殿の落成を記念して行った千僧供養によって始まる。日奥上人は、法華経に帰依していない秀吉の招きを断る。さらに日奥は同供養会を引き継いだ家康の権力にも屈しない。日奥はついに流罪になり、寛文五年には法令をもって禁止される。信者たちは地下に潜伏、僧侶達は命がけで権力者の取り締まりの網の目をくぐり布教して回る。法難は幾度か繰り返されて行川で村人十四人が捕らえられ、七人は拷問を受け牢死する「行川法難」である。しかし信仰のともしびは消えない。不受不施派が信教の自由を獲得したのは明治九年である。加川さんは町工場で働いている人だ。あとがきでこういっている。「僕はいつも挫折感を持っています。人間はどうしてこうモロイものだろうか、こんな気持が、三百年にわたる抵抗を続けてきた不受不施派に近づけたのです。」

房総禁制宗門史年表、不受不施派名簿も付されている。貴重な本だ。

東京都豊島区巣鴨三ノ五ノ一八、国書刊行会（〇三―九一七―八二八七）三百十四ページ　四千五百円。

筆者の住所は印旛郡酒々井町下岩橋四四〇―三電話。四三四―九六―四三七九

（朝日新聞　一九七七年十月三日(月)　朝刊より）

会計報告

〔収入〕	会費	56,000
	郷土研補助	13,320
		69,320
〔支出〕	代料	24,400
	代料	18,300
	菓子	2,000
	明灯	8,620
	観茶	16,000
	バス代	
		69,320

以上の会計報告に訂正、…会員の方に納めお願い致します。

※尚、52年度の会費は未納の方お願い致します。

第004号（NO3）酒々井町郷土研究会会報 S52年12月24日(土)

郷土研日誌

○九月十日

会報第三号発行
予定より一か月遅れの為、相
京会長はじめ印刷係の苦
田女史イラ〈・メワ〈？
新会員十名　総一二五名
まだ〈　増えそう。

○九月十八日

野草観察会・上郷方面
曇ときどき雨の中、野草
にとりつかれた面々五名
わずか五名なれど収穫は多
く　山ほどとぎす、おみな
えしの群落に泣いて喜ぶ若
き仲間！

（ナンバンギセル）
アトロスパイプロの花
ピンクの葉はなし

○十月二十二日

野草観察会
大崎・伊篠・下岩橋方面
彼岸花の咲き乱れる中・
ミゾソバ、ミズヒキ草の
かれんな美しさに目をと
める・ナンテンハギ・四
ツ葉ハギの花の美しさは
絶品・ヌスビトハギも今
がさかりと・そこかしこに
根に毒を持つトリカブト
の紫の花・舞人が頭にか
ぶる冠に似ている為に名
付けられたとか……引っ
ぱると簡単に抜けた。
尾上の山中で・ススキの
根に寄生しているナンバ
ンギセルを見つけ驚く。
そのようと近くを見る
とユウレイタケが図鑑の
写真とそっくりにこわる
山登りの妙味ここにあり。

○十月二十六日・二十八日

木更津方面・史跡見学会
参加者　二七名・二九名
申込み第一番の成田浦沿
当日はすっかり忘れて外出
会長、電話で連絡とるも通
じずに・おいてきぼりもやむ
ナシ・九十九谷の景観を大
いに期待して特大の双眼鏡
持参したのに・時間の都合
で見られず・残念無念
帰路車中のど自慢はおしり
の痛みを忘れさせる例より
の鎮痛剤・それにしても
京漬・綿貫・左近・富沢氏
一月二十八日の新年会にて
アンコールお願い。

○十一月十九日

野草観察会・小中学校周辺

○十二月十日

運営委員会

五十三年度事業計画案についての
話合いで次の事項が決定される。

(一) 古文書研究会
年間十二回実施

(二) 郷土史講座
年間十回実施

(三) 野草観察の会
年間十二回実施

(四) 家紋調査
五十三年後期実施

(五) 石仏調査
五十三年度より三ヶ年計画

(六) 史跡見学会
年間四回実施

(七) 会報の発行
年間四回以上発行

(八) その他運営委員会にて
必要と認めた事項の実施

想

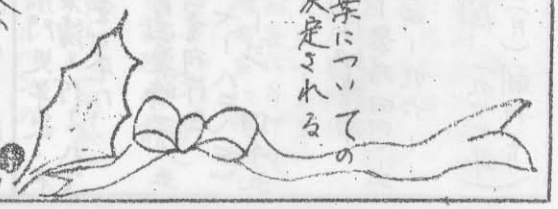
海保芳雄

カヤぶき屋根や白壁の土蔵をみると、なぜか気がふるいたつ。地域の様相を急速に変えることに、専念した近年のあり方を反省し、今・その立て直しを図ろうとだれもが考えている。しかし・それは「昔はよかったなあ」という詠嘆におわってはならないと思います。盲目的なむかしへの復帰の願望ばかりで、いちずに復古主義に走ってはならないと思います。

肝心なのは・むかしと今のくらし方をくらべることのなかから・現代生活への反省のこころを育てていかねばならない。われわれが怪しげもなく見捨ててしまったものなかに、いまでも残しておけばよかったと思われるものはすくなくない。先人のくらし方に学ぶべきところは多いはず。だ。それはなにか・またそれはなぜ現代から失われてしまったのか・それをとりもどすにはどうしたらよいか・そこに思いをはせねばならない。先人の遺産を学んでこそ・その将来に目が向くものと思います。知新温古のことばのように。

そんな考えから・わたしは先人達のくらしの道具や農漁具にすくなからず興味をもちつづけています。

手垢やほこりの下の木肌に触れると歴史を語りかけてくれます。先人のエネルギッシュな情熱を感じ気がたぎってきます。今のおれにできることを精一杯やらねばと奮い立つのです。



第004号（N04）　涸々井町郷土研究会会報　昭和52年12月24日(土)

初詣

新しい年が来ます。昭和五十三年、輝かしい良い年でありますように、祈ります。

五十三年度定時総会

五十三年度定時総会を左記により開催いたします。万障繰り合わせ御出席下さるよう御通知いたします。

（記）

一、日時　一月二十八日(土)午後一時
二、会場　涸々井町青年研修所
三、議題
イ、五十二年度収支決算書の承認
2、五十三年度事業計画の承認
3、五十三年度収支予算の承認
4、その他必要と認めた事項

通知

※尚個人宛の総会通知は省略させて戴きます。

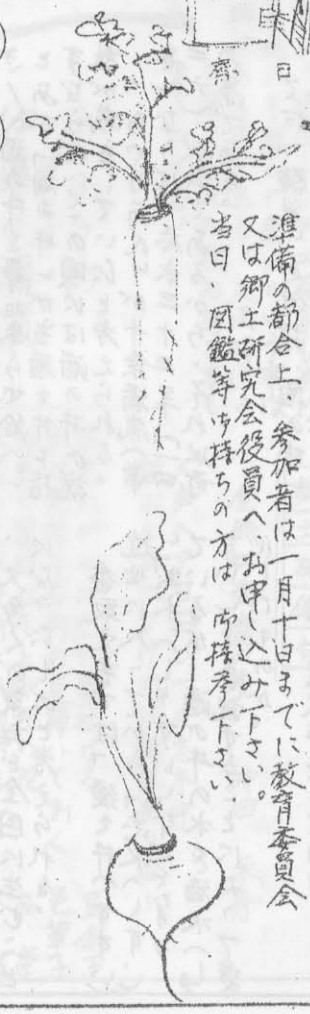
せり、なずな、ごぎょう、はこべら（ハハコグサ）、ほとけのざ（タビラコ）、すずな（カブ）、すずしろ（ダイコン）これぞ七草

野草観察会・一月は七草かゆを食べる会を催します。古歌に詠まれた春の若菜を食べて長寿と幸福を祈りましょう。

日時　一月十四日(土)　午前十時より
場所　青年研修所
会費　一〇〇円也（材料費）

△△△△△

準備の都合上、参加者は一月十日までに教育委員会又は郷土研究会役員へお申し込み下さい。当日、図鑑等お持ちの方は御持参下さい。



後記

最後の会報を書き終えてほっとしています。後記を書くのが一番の楽しみでした。「ツカレタナー」が一番印象に残ったという F氏。コ本文は後にまわして先ずは読む、編集後記。会員消息……と泳んで下さった O氏、最後の印刷係を引受けていただく F様、我々をさらりと聞いて、ポンと元気づけ役の I氏、塚さんのおかげで初めての会報づくり何とか役目をはたしました。初年度野草の会の活躍のみがめだちました。来年は、古文書研究等他方面の学習も予定しています。幅広く同好の志を求め、楽しみをふやしましょう。

新春はまずみトソでカンパイ。それから本物で乾杯！かるたとりは「天っ風……乙女」が唯一の取り札。坊主めくりで本領発揮！まだ（　）その前に今年は銚子へ初日の出を拝みに行こうかな、寒いかナ？ではまた塚さんよい年正月を。

(M)